

『躬恒集』注釈（十六）

平沢竜介・嶋田洋子・玉木紗也香・
中井瑞葉・渡辺優子

781 いかで人これからさきに渡りけん水の上にはあとも見えぬを

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○詞書―〔甲〕本は「からさきといふたいを」。○いかでひと―〔甲〕本は「いかにしてわれ」。

【通釈】

どうやって人がこれから先に渡つたのだろう。水の上に人の渡つた跡も見えないのに。

▽唐崎を詠み込んだ物名歌。

【類歌・参考】

からさき

あほのつねみ

かの方にいつからさきにわたりけむ浪ちはあともこのらざりけり

(古今和歌集・卷十・物名・四五八)

(からさき)

伊勢

浪の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなるらむ

(古今和歌集・卷十・物名・四五九)

粟田右大臣家の障子に、からさきに祓したる所にあみひくかたかける所

平佑拳

みそぎするけふからさきにおろすあみは神のうけひくしるしなりけり

(拾遺集・卷十・神楽歌・五九五)

堀河院御時百首たてまつり侍りけるに、はるたつところをよめる

大藏卿匡房

こほりゐししがのからさきうちとけてさざなみよする春かぜぞふく

(詞花和歌集・卷一・春・一)

湖上月といへるころをよめる

藤原顕家朝臣

月かげはきえぬこほりとみえながらさざ浪よするしがのからさき

(千載和歌集・卷四・秋上・二九四)

782

年^{とし}経^かれどなるともみえぬ瓜^{うり}生^ふ坂^ざ春^かの霞^{すみ}のたてばなりけり

瓜生坂

躬恒

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○瓜生坂―山城国の歌枕。現在の京都市左京区北白川の東北にある瓜生山に登る坂。

○たてばなりけり―「立つ」に「断つ」を掛ける。

【通釈】

瓜生坂

躬恒

年が経つても実がなるとは見えない瓜生坂であることよ。春の霞が立ってその実を切ってしまうのだなあ。

【類歌・参考】

瓜生坂薄霧深

左勝

ほかよりはたちやそふらむ秋霧の瓜生の坂にくらくもあるかな（応和二年九月五日庚申 河原院歌合・一七）

右

慧慶法師

名にたかくなりはしぬれど瓜生坂霧のみたてばみえずもあるかな

（応和二年九月五日庚申 河原院歌合・一八）

783

年経れどとしふ這ふともみえぬつづらつづら折をり行来ゆきの人のひとくればなりけり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○作者名表記―〔甲〕本は「みつね」。○這ふともみえぬ―底本は「あふともみえぬ」。〔甲〕本によって校訂

する。○つづら折り―〔甲〕本は「つゝらおり」。曲がりくねった坂道・山道。植物の「葛」を掛ける。○行来の人のくればなりけり―底本は「はるのかすみのたてはなりけり」。〔甲〕本によって校訂する。「くれ」に、「来れ」と「繰れ」を掛ける。

【通釈】

つづら折り

年が経っても這って伸びていくとも見えないつづら折りであることよ。行来の人が引きよせたぐるからなのだなあ。

▽782と783は、ともに「年経れど…ともみえぬ…ばなりけり」という表現をとる。

【類歌・参考】

(題しらず)

寵

山がつかきほにはへるあをつづら人はくれどもことづてもなし

(古今和歌集・卷十四・恋四・七四二)

女につかはしける

三条右大臣

名にしおはば相坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

(後撰和歌集・卷十一・恋三・七〇〇)

女のもとにまかりたるに、はやかへりねとのみいひければ

よみ人しらす

つれなきを思ひしのぶのさねかつらはてはくるをも厭ふなりけり (後撰和歌集・卷十一・恋三・七八七)

ちかうてとをき物 宮のべの祭。思はぬはらから親族の中。鞍馬のつゝらをりといふ道。師走のつごもりの日、

正月の一日の日のほど。

(枕草子・一五九段)

784

躬恒問ふ

恋するに消えかへる身と春立ちて降りくる雪といづれまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○消えかへる―忠岑集では「きえかくる」。785の歌より「きえかへる」に改める。すっかり消え入りそうなほどと思いつめる。正常な心地がなくなる。

【通釈】

躬恒が尋ねる

恋をして心が消え入りそうな身と春になって降ってくる雪とどちらが勝っているのか。

【類歌・参考】

はる立つ日よめる

凡河内躬恒

春立つとききつるからにかすが山消えあへぬ雪の花とみゆらむ

(後選和歌集・卷一・春上・二)

題知らず

平祐拳

春立ちて朝の原の雪見ればまだふる年の心地こそすれ

(拾遺和歌集・卷一・春・七)

さだふんが家歌合に

みつね

春立ちて猶ふる雪は梅の花さくほどもなくちるかとぞ見る

(拾遺和歌集・卷一・春・八)

785

忠岑答ふ
たけみねこたへ恋こひするに消きえかへるとも身みはうせじ春はるふる雪ゆきのあととはとまるや

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○春ふる―忠岑集では「はるくる」。784の歌より「はるふる」に改める。

【通釈】

忠岑が答える

恋をして心が消え入りそうに思いつめても、その身はなくなることにはあるまい。春に降る雪は跡が残るだろうか。

【類歌・参考】

つつみの中納言のみやす所を見てつかはしける

小野宮太政大臣

あなこひしはつかに人をみづのあわのきえかへるともしらせてしかな（拾遺和歌集・卷十一・恋一・六三六）

人の許につかはしける

前中納言資平

かけてだに思ひもしらじあさぢふの小の朝露消えかへるとも

(統拾遺和歌集・卷十四・恋四・九九九)

題不知

権大納言師信

いたづらにきえかへるともしらせばやゆきては来ぬる道芝の露

(新後撰和歌集・卷十三・恋三・一〇四四)

《大和物語による補遺》(新日本古典文学大系による)

786

たちよらむ木のもともなきつたの身はときはながらに秋ぞかなしき

【他出文献】

躬恒が院によみて奉りける。

立ち寄らむ木のもともなきつたの身はときはながらに秋ぞかなしき

(大和物語・三十三段)

【語釈】

○つたの身―「蔦」に「つたなし」の「つた」を掛ける。○ときはながらに―常緑でありながら。六位の身分であることを暗示する。

【通釈】

立ち寄ってすがって伸びていく木もない蔦のようなつたない我が身は、いつも緑で枯れることはありませんが秋は悲しいことです。―いつも緑の袍を着て紅の袍を着ることが出来ないつたない我が身は、紅葉に映える秋が辛く思われます。

▽六位・七位は緑の袍。四位・五位は緋（赤）の袍。五位になれない我が身の不遇を嘆いた歌。

【類歌・参考】

寛平御時きさいの宮の歌合によめる

源むねゆきの朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

（古今和歌集・卷一・春上・二四）

五節の所にて、閑院のおほい君につかはしける

もろまさの朝臣

ときはなる日かげのかづらけふしこそ心の色にふかく見えけれ

（後撰和歌集・卷十一・恋三・七三五）

しらくものこのかたにしもおりぬるは天つ風こそ吹きて来つらし

【他出文献】

おなじ帝の御時、躬恒を召して、月のいとおもしろき夜、御遊びなどありて、「月を弓はりといふは、なにの心ぞ。そのよしつかうまつれ」とおほせたまうければ、御階のもとにさぶらひて、つかうまつりける。

照る月を弓はりとしもいふことは山べをさしていればなりけり

禄に大桂かづきて、また、

白雲のこのかたにしもおりゐるは天つ風こそ吹きてきつらし

(大和物語・百三十二段)

【語釈】

○このかた―「この方」と「この肩」を掛ける。○おり―「織り」と「下り」を掛ける。○きつ―「来つ」と「着つ」を掛ける。「織り」と「着つ」は縁語。

【通釈】

白雲がこちらに下りてきているのは空吹く風が吹き寄せてきたかららしい。――私の肩に白い大桂が掛かっているのは帝のお恵みによるものです。

▽醍醐天皇から禄として大桂を賜った時の歌。

【他出文献】

とものあづまへまかりける時によめる

よしみねのひでおか

白雲のこなたかなたに立ちわかれ心をぬさとくだくたびかな

(古今和歌集・卷八・離別・三七九)

(題しらず)

ただみね

風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か

(古今和歌集・卷十二・恋二・六〇一)

五節のまひひめを見てよめる

よしみねのむねさだ

あまつかぜ雲のかよひぢ吹きとぢよをとめのすがたしばしとどめむ

(古今和歌集・卷十七・雑上・八七二)

ひえの山の念仏にのほりて月をみてよめる

良暹法師

あまつかぜ雲ふきはらふたかねにているまでみつるあきのよの月

(詞歌和歌集・卷三・秋・一〇〇)

《俊頼髓脳による補遺》（日本古典文学全集による）

躬恒 みつね

788 a おく山に船こぐ音のきこゆるは

【他出文献】

連歌こそ、世の末にも、昔におとらず見ゆるものなれ。昔もありけるを、書きおかざりけるにや。

躬恒

おく山に船こぐ音のきこゆるは

貫之

なれるこのみやうみわたるらむ

（俊頼髓脳）

【通釈】

躬恒

奥山に船をこぐ音がきこえるのは

【類歌・参考】

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風にごゑをほにあげてくる舟はあまのとわたるかりにぞありける

(古今和歌集・卷四・秋上・二二二)

渡霞といふ事をよませ給うける

後小松院御製

紀の海やゆらの湊の朝ぼらけかすみの底に舟こぐらしも

(新続古今和歌集・卷十七・雑上・一六二二)

788 b 熟^なれるこのみやうみわたるらむ

貫^{つらゆき}之

【他出文献】

788 a を参照。

【語釈】

○なれるこのみ―木に成った実。○うみわたる―「海を渡る」意と「一面に木の実が熟す」の意を掛ける。

【通釈】

なっている木の実がうみわたる（海を渡る。一面に熟す）からだろうか。

【類歌・参考】

（題しらず）

よみ人しらず

なのみしてなれるも見えず梅津河のせきの水ももればなりけり

（拾遺和歌集・卷九・雑下・五四八）

地獄絵につるぎのえだに人のつらぬかれたるを見てよめる

和泉式部

あさましやつるぎのえだのたわむまでこはなにの身のなれるなるらん

（金葉和歌集二度本・卷十・雑下・六四四）

故女四のみこののちのわざせむとて、ほだいしのずずをなん右大臣もとめ侍るとききて、このずずをおく

るとてくはへ侍りける

真延法師

思ひでの煙やまさんなき人のほとけになれるこのみみば君

（後撰和歌集・卷十七・雑三・一二二六）

返し

右大臣

道なれるこの身尋ねて心ざし有りと見るにぞねをばましける

（後撰和歌集・卷十七・雑三・一二二七）

（題不知）

凡河内躬恒

789 やまざともうきよなればや有あけの月もいるさにすみなれにけむ

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○いるさー『八雲御抄』は但馬、『夫木抄』は但馬もしくは丹後とする。現在の兵庫県出石郡出石町宮内の此隅山の嶺続きともいうが未詳。その名に「入る」「射る」を響かせ、枕詞「梓弓」に続くことが多い。ここでは「入る」を掛ける。○すむー「住む」と「澄む」を掛ける。

【通釈】

山里も辛い世であるからか、有明の月も入佐の山に入りそこに住み慣れてしまったのだろう。

【類歌・参考】

寄山恋といへる事をよめる

大中臣公長朝臣

こひわびておもひいるさのやまのはにいつる月日のつもりぬるかな(金葉和歌集二度本・卷八・恋下・四二四)

(郭公のうたとてよみ侍りける)

権大納言宗家

夕づくよいるさの山のこがくれにはのかにもなくほととぎすかな

(千載和歌集・卷三・夏・一六三)

《類聚證に見られる躬恒歌》(歌学大系による)

790 故里のあを柳こそ芽ぐみいづれ手をだに触ればふしさしぬべし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○芽ぐみいづれ―芽を出した。○ふし―こぶのように太くかたまつたもの。ここでは柳の芽のことか。○さし

ぬべし―「さす」は草木が萌え出る、または枝が伸びるの意。ここでは柳の芽が伸びることをいうか。

【通釈】

故里の青柳が芽を出したことだ。手を触れただけで芽が伸びてしまいそうだ。

【類歌・参考】

百首歌たてまつりし時

式子内親王

あめのしためぐむくさ木のめも春にかぎりもしらぬみよの末末

(新古今和歌集・卷七・賀・七三四)

先照高山

(崇徳院御歌)

朝日さすみねのつづきはめぐめどもまだしもふかし谷のかげ草

(新古今和歌集・卷二十・釈教・一九四六)

791 白雪の降りはずめども消えもせて春の柳は萌え出でにけり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○萌え出でにけりー「萌え」に「燃え」を掛ける。

【通釈】

白雪は降りつもるけれど消えもしないで春の柳は萌え（燃え）出でたことだ。

【類歌・参考】

二条のきさきのはるのはじめのうた

雪の内に春はきにけりうぐひすのこほれる涙今やとくらむ

（古今和歌集・卷一・春上・四）

題しらず

よみ人しらず

梅がえにきゐるうぐひすはるかけてなけどもいまだ雪はふりつつ

（古今和歌集・卷一・春上・五）

かれにけるをとこのもとに、そのすみけるかたのにはの木のかれたりけるえだををりてつかはしける

兼覧王女

もえいづるこのめを見てもねをぞなくかれにし枝の春をしらねば

（後撰和歌集・卷一・春上・一四）

奈良にて人人百首歌よみはべりけるにさわらびをよめる

権僧正永縁

やまざとはのべのさわらびもえいづるをりにのみこそ人はとひけれ
（金葉和歌集二度本・卷一・春・七一）

《古本説話集による補遺》（新日本古典文学大系による）

792 てふらなる月もながめじもさなきにようべ来ぬこそしこらつらけれ

【他出文献】

今は昔、躬恒がもとへ人の「来む」と言ひて来ざりければ、またの夜、月の明かりけるにつかはしける、
てふらなる月もながめじもさなきにようべ来ぬこそしこらつらけれ

これも東人のまねにや。
（古本説話集）

【語釈】

○てふら—「けうら」（清らかで美しい）のことか。○もさなき—「まさなき」（具合の悪い）のことか。○よ
うべ—「昨夜」の意か。○しこら—「そこら」（大変、甚だしく）のことか。

【通釈】

清らかな月も眺めないことにしよう。具合が悪くて昨夜いらっしやらなかったことが大層辛いことです。

▽東国の方言を用いて詠じた歌か。

（『白百合女子大学研究紀要』35号（平成十一年十二月）より掲載を始めた

「『躬恒集』注釈」は今回を以って終了する）